

# GIとつきあうおんなたち

## — 占領期日本における「オンリー・ワン」

茶園敏美

### <要旨>

本論は、占領期の日本をあらゆるひとたちが相互交渉し対処する場を、「コンタクト・ゾーン」としてみる。それはたんに、勝者米国が敗者日本を統治したというだけでなく、日本のおんなたちとGI（米兵）が対等に相互交渉をおこなっているということを明らかにする。とりわけ本論では、1人のGIと関わる、「オンリー」や「オンリー・ワン」と呼ばれていたおんなたちに注目する。

具体的には、占領期に京都社会福祉研究所が調査した、26名のおんなたちの口述記録を考察する。彼女たちは、GIと性的な関係を持ったという理由で性病検診を強制的に受けさせられたおんなたちである。彼女たちは「高級街娼」とみなされ、「オンリー・ワン」と分類された。

さらに本論では、さまざまなおんなたちがお互いに助け合う可能性についても論じる。とりわけ、占領期に実施された強制的性病検診を受けるために待つ空間であった、病院の待合室に注目する。病院の待合室はGHQや日本政府がおんなたちの間に「分断支配」[Enloe 2000; エンロー 2006]を持ち込もうとする空間であるからだ。

本来、あらゆる立場を超えておんなたちが、一斉検挙という暴力に対して互いに手を結ぶことができるにもかかわらず、当局側の「分断支配」によって被害を受けているおんなたち同士が互いに反目しあう状況が生み出される。

だがコンタクト・ゾーンという視点で彼女たちとGIたちとの関係に注目すると、エンローの「分断支配」も、彼女たちを調査した研究員たちのように一義的な力関係を前提とする分析にすぎないことがわかる。

彼女たちは、これまでの既存の枠組みでは分析できないおんなたちである。「規範」のものさしで彼女たちを測ることをやめたとき、彼女たちのことをもっと理解することができるだろう。

## I はじめに——「オンリー・ワン」という「パンパン」

本論は、占領期の日本のあらゆるひとたちが相互交渉し対処する場を、「コンタクト・ゾーン」としてみる。それはたんに、勝者米国が敗者日本を統治したというだけではなく、日本のおんなたちとGI（米兵）が対等に相互交渉をおこなっているということを明らかにする。本論では、特定のGI（米兵）と関わるおんなたち、とりわけ、「オンリー」や「オンリー・ワン」<sup>1</sup>と呼ばれていたおんなたちに注目し、考察する。

Pratt[1992,2008]は、植民地という空間において、支配／被支配という非対称的な関係が存在するなかで、異質な文化が互いに出会い、衝突し、格闘する場をコンタクト・ゾーンという概念で示す。田中[2011a:ii]はプラットの概念を広げ、コンタクト・ゾーンは、「異なる文化背景を有する人びとの接触が生じる領域」であるとし、田中[2011b]は占領期の日本社会をコンタクト・ゾーンと位置づけ、「パンパン」たちをめぐる、日本の知識人、運動家、子どもたちといったさまざまな立場の言説分析をおこなっている。

ここで「パンパン」について説明しておきたい。

「パンパン」とはGIへ有償で性的サービスをおこなうおんなたち、売春婦のことである。彼女たちは、遊郭のような管理された場所には属さず、街角に立って、GIに直接有償の性的サービスを交渉する。街角に立つ娼婦という意味で、当時、「街娼」とも言われた彼女たちは、他にも「闇の女」、「夜の女」、「パン助」とさまざまな呼称がある。これら多くの呼称の中で、「パンパン」が現在一番よく知られていることばである。厳密に言えば、日本人相手の「パンパン」もいるが、本論ではGIに限って論じる。

本論でとり挙げる資料は、1949年10月に出版された、竹中勝男・住谷悦治編『街娼実態とその手記』（有恒社〔これ以降『街娼』と表記〕）である。この資料はGHQ（General Headquarters of Supreme Commander for the Allied Powers:GHQ/SCAP, 連合軍最高司令官総司令部）の軍政部厚生課長エミリー・パトナムの助言のもと、京都社会研究所が京都地区における200名のGI相手の「街娼」におこなった調査報告書である<sup>2</sup>。同研究所は、緊急に着手すべき調査のうちの一つとして、「街娼の実態」調査をおこなった。パトナムからは、「研究調査の態度は、あくまで科学的客観的であるべきこと」と命じられ、今回とり挙げるおんなたちの語りは、「少しも訂正していない」（185）ものである。

この資料のすぐれている点は、研究員や調査員たちの視点のみにとどまらず、「街娼の

1 本論でとりあげる資料に従い、「オンリー・ワン」ということばを使う。京都では、一般的に「オンリー・ワン」ということばが使われているようだが、この資料のなかで東京在住のおんなは、「オンリー」と語っているため、「オンリー・ワン」と「オンリー」の違いは地域性が関係しているかもしれない。というのも、占領初期は関西では、街娼のことを「闇の女」、関東では「夜の女」という名称が新聞では一般的であったからである。「パンパン」という名前はもう少しあとに登場する[茶園 2013a]。

2 『街娼』は、「戦後における特殊な変動によって、街娼となったものの調査であって、今度の場合は、在来の娼妓、やとな〔やとい仲居〕、特定の居所をもって売淫行為をして生計を維持するものについては、それらを除外する事」（119）と明記されているように、占領軍将兵と交際する街娼を調査対象にしている。あからさまに占領軍将兵と明記されていないのは、この調査報告書が出版された1949年はGHQによる言論統制の時期にあたるためである。本論文をとおして、引用のあとの括弧付き番号は、すべて『街娼』の引用該当ページである。

実態手記」と題して、実際に性病検診のため強制的に検挙〔これ以降『街娼』の表記に従いキャッチと表記〕された200名中89名のおんなたちの生の声が掲載されていることにある。調査する側とされる側の視点が同時に掲載されている点において、この資料は瞠目すべきものがある。『街娼』で調査対象となった200名のおんなたちの多くは、街角か居住先でキャッチされたおんなたちだった。そのうちの89名が、自らのことを調査員に語ったのである。

この資料の価値を高く評価した上で『街娼』を通読し終えたとき、ある違和感が残った。その違和感とは、この資料に収録されているおんなたちの語りと、彼女たちすべてを「パンパン」とみなす調査書との間に生じる、ある不協和音である。その不協和音とは、調査書で彼女たちは「パンパン」という一語でひとくくりにされ、一義的な意味を付与されていたことだ。さらに同調査書では「パンパン」を、「バタフライ」と「オンリー・ワン」の2種類に分類し、「バタフライ」は蝶になぞらえて、「日々相手をかえ、活動家は一晩に数名と取引する」(91)おんなたちのことを指し、「オンリー・ワン」は文字通り、特定の1人を相手に売春する「高級街娼」(102)を指し示すことばとして使用されている。だが実際には、調査書に収録されているおんなたちの語りは、「パンパン」というひと言ではおさまきれない多様性があり、彼女たちを取り巻く場における関係性は複雑であった。とりわけ「オンリー・ワン」と称される、特定のGIとつきあうおんなたちの語りに、その多様性および複雑な関係性が明確に表れていた。本論ではそのことを『街娼』から明らかにする。

ジェンダーの視点から日常の軍事化について発言を続けてきた国際政治学者シンシア・エンローは、「軍人の妻が、軍隊の売春婦と手を結び、女性兵士と共同行動を起こした例など、いかなる国においてもほとんど存在しない」と主張する〔エンロー2006:10〕。そして政府当局が、このような「分断支配」を生み出してきたと述べる。すなわちおんなたちが「軍人の妻」、「軍隊の売春婦」、「女性兵士」というかたちで分断された上で軍人や軍隊に「貢献」しているのは、結果的に彼女たちが「分断支配」されている状態にあるという。

占領期の日本においても、政府主導、正確に言えば、GHQに日本政府が追従するかたちで、おんなたちの間に「分断支配」を持ち込もうとしていた。こうした「分断支配」は、さまざまな空間が想定されるが、本論ではあらゆる出自のおんなたちが出会う性病検診を待つ空間において、「分断支配」が機能しているかどうかを考察する。

以上のような観点から本論は、占領期の日本社会のなかで、おもに1) 下宿、2) 面接現場、3) 病院の待合室といった具体的な3つの場をコンタクト・ゾーンとして位置づけ、GIと「オンリー・ワン」と言われたおんなとの関係に注目し、次のような流れで論じる。

まずIIでは『街娼』の研究員たちが、調査対象にしたおんなたちにどのような視線を向けていたかについて考察する。IIIでは下宿で「オンリー・ワン」とその交際相手が、IVでは面接現場で「オンリー・ワン」と『街娼』の調査員が、それぞれどのようなコンタクトをおこなっていたか、そしてVの病院の待合室では、おんなたち同士がコンタク

トしている場を『街娼』の研究者はどのような視線でみていたか、さらに待合室で出会ったおんなたちが助け合い、交流している可能性について考察をおこなう。

本論のⅢとⅣで考察する資料は『街娼』の中の、「二 街娼の口述書」〔これ以降、口述と明記〕である<sup>3</sup>。調査日程と方法については、「昨年〔1948年〕12月から本年〔1949年〕4月までに、200余名の街娼について個別的に面接し、相当の時間を費し、詳細な聴取りを作製し、彼女らの実態を内面的にも把握しようと試み、手記、聴取書、手紙、メモ等、相当の分量を収集しえたのであり、またそれこそ、当研究所の調査の特徴であると思われる」（121）と明記されている。『街娼』が発行された時期は、占領期のGHQが言論統制をおこなっていたにもかかわらず、GIとの関係をおんなたち自らが語っている点において、彼女たちが「オンリー・ワン」ということばをどのようにとらえていたか知る上で貴重な資料である。

さらに本論では多数の口述を扱っている関係上、読者の混乱や誤読を極力避けるため、仮名の氏名をあえてアルファベット表記にした<sup>4</sup>。引用文中の下線はすべて論者によるものである。

ここで本論のⅢとⅣにおける分類方法について説明する。本論では彼女たちの個別の語りを、なるべく他の語りにはない「体験」によって分類をおこなっている。たとえば本論「Ⅲ-6 レイプ被害に遭ったおんなたち」の分類方法は、本論で論じる26名の語りのうち、自身のレイプ被害について語っているおんなたちの「体験」をすべてⅢ-6のカテゴリーに分類し、レイプ被害に遭ったおんなたちがその後GIとどのように出会い、どのような関係を持つに至ったかに注目している。

とはいえ本論を読みすすめると、ある者の「体験」が別のカテゴリーの「体験」と重複している場合が多々あることに気づくだろう。たとえば「レイプ被害に遭ったおんなたち」の語りは、さらに結婚を考えている者、仕事を続けている者、家族を援助している者というような、他のカテゴリーにも該当する語りでもある。これらの語りが示すように、おんなたちの「体験」は網の目のように重なり合っている。

このようにおんなたちの「体験」は本来分類不可能であることを考慮してもなお、本論ではおんなたちの語り、カテゴリー別に分類し考察をすすめている。その理由として、たとえばレイプ被害に遭ったおんなたちとGIとの関係をみていくことによって、彼女たちが「GIにレイプされたおんなたち」という一義的な意味付与では決してみえてこない、兵士との関係が個別具体的に浮かび上がるからである。

さらに本論ではおんなたちが自身のことを「オンリー・ワン」と述べているか否か、他のことば（「愛人」、「パンパン」、「パン助」等）を使用しているかについても、注意を

3 この資料は「街娼の実態手記」と題して、「一 街娼の手記」16名、「二 街娼の口述書」62名、「三 街娼の聴取書」11名の三部構成になっている。「一 街娼の手記」には「オンリー・ワン」と思われるおんなたちの手記ではないこと、「三 街娼の聴取書」は、おんなたちの発言を研究所の調査員がまとめたものなので、今回は考察対象からはずした。また原文では番号がところどころ抜けているが、おそらく聞き取った記録が載せられない場合があったと思われる。その点について、『街娼』ではとくに説明はない。

4 『街娼』では、調査対象者の姓名はすべて仮名で掲載されている（まえがき2）。年齢は『街娼』では数え年になっているが、筆者のほうで実年齢を表記している。実年齢は、調査日から生年月日を引いて割り出した。本論では旧仮名遣いや文語体を、現代仮名遣いや口語体にあらためている。

払っている。これは本論「V-2 おんなたちの分断回避の可能性」を考察する際に、重要なキーワードとなるからである。

さあ、『街娼』に掲載されている、おんなたちの声に耳を澄ましてみよう。

## II 研究員たちによる「パンパン」の表象——おんなの視点・おとこの視点

本章では、京都社会研究所の主要研究員たちによる、「パンパン」<sup>5</sup>の描写をとり挙げる。調査を実施した研究員たちは、彼女たちのことをどのようなまなざしで見ているのだろうか。

次の描写は、住谷悦治がみた、彼女たちの描写である。

彼女たちを街路において見るとき、その濃厚な化粧、華美な洋装、上等の装具、靴等に包まれて颯爽として人もなげに歩行している姿は、行き交う通行の目をそばだたしめるに十分である。彼女たちも、通行の人々の注目を満身に浴びていることを意識し、相当以上に虚栄心を満足せしめて、口紅や五本の指の爪のはでなマニキュアまでも神経を震動せしめている (22)。

ここで注意したいのは、下線部分である。すなわち、「わたし、パンパンなんです」と住谷に言ったおんなたちの外見を、住谷が描写しているのではなく、「あのような格好をしているおんなたちは、パンパンに違いない」と住谷が思っているおんなたちの描写である。

次の描写は、豊田慶治の描写である。

ゆきずりぎま、風になびく巻髪から刺激の強い香料が流れる。どぎつい化粧の中でも一際、ルージュの毒々しさが眼立つ。血塗られたようなその唇、グリーンの日除けグラスの内側にきらりと黒い瞳が光る。だがおおいかくせぬその隈ぶち、一様に肩から下げたナイロンバッグ、野生美をむき出しにして挑むようにすばやいその足取り (106)。

このように豊田も住谷と同じく、街路でみかけた、「パンパンに違いない」と豊田が思っているおんなたちの描写である。

次の描写は平安病院で大塚達雄が目撃した、おんなたちの描写である。大塚も彼女たちのことを「パンパン」だとみなしている。

黄色人種におよそ不似合いなルージュ、かきまゆ、の顔にモダン髪をふりたて、赤青黄チェックのロング・スカートを手先のオーバーの下からのぞかせて、ナイロン靴下

---

5 本論では、「街娼」を「パンパン」ということばで表している。

にダンス靴をほこらしげに鳴らしている不調和なニュルックのモデルズ (89)。

占領期の平安病院は、京都市内でキャッチされたおんなたちの性病検診をおこなっていた。平安病院には、強制的に性病検診を受けさせられるおんなたちが大勢いた。この病院で大塚は、「黄色人種におよそ不似合いな」化粧をして、「不調和な」身なりをしたおんなたちの外見でもって彼女たちを、「パンパン」だと判断している。

しかしながらこうした判断は、大塚に限ったことではない。というのも当時、京都市内外各所にキャッチの注意書きが貼り出されており、「平安病院の近くの街路には、松原署の名において大きく貼りだされた」(279)からである。

注意書きには、「進駐軍々人に対し、左の行為をなすものは占領目的に有害なる行為をなすものとして、軍事裁判に附されます」として、1) 進駐軍々人に売淫をしたもの、2) 売淫の手だすけをしたもの、3) 売淫の場所をかしたもの、と3点を挙げ、最後に、「夜間さまよい歩く婦女子は、あらぬ疑いを受けて取り調べを受けるときがないとも限りませんから注意してください」ということばで締めくくられていた。

この注意書きに従うと、平安病院で性病検診を受けさせられるおんなたちに世間は、「進駐軍々人に売淫をした」おんなたち、すなわち「パンパン」であるという視線を向けていたのであり、大塚もそのまなざしを共有していたことがわかる。

当時は、「パンパン」と間違えてキャッチする、ミス・キャッチが日本各地で横行していた状況を踏まえると、大塚が描写したおんなたちは、「パンパン」とは限らない。

さて、住谷、豊田、大塚の「パンパン」の描写には、共通するイメージがある。それは、大きく分けて、化粧や髪型・服装・態度の3点である。

以下その共通点を確認しよう。

#### <化粧>

濃厚な化粧、口紅や五本の指の爪のはでなマニキュア (住谷)

どぎつい化粧、ルージュの毒々しさ、風になびく巻髪 (豊田)

黄色人種におよそ不似合いなルージュ、かきまゆ、の顔にモダン髪 (大塚)

#### <服装>

華美な洋装、上等の装具、靴等 (住谷)

肩から下げたナイロンバッグ (豊田)

赤青黄チェックのロング・スカート、派手なオーバー、ナイロン靴下、ダンス靴 (大塚)

#### <態度>

颯爽として人もなげに歩行している姿 (住谷)

野生美をむき出しにして挑むようにすばやいその足取り (豊田)

ナイロン靴下にダンス靴をほこらしげに鳴らしている (大塚)

占領期当時は、各地にGHQ関係者専用のダンスホールやカフェがあることを考えると、彼らが「パンパン」とみなしていたおんなたちは、ダンスホールやカフェの従業員かもしれない。あるいは、化粧が「派手」なのもGIの恋人からのリクエストかもしれない。「上等の装具」、「ナイロン靴下」、「ナイロンバッグ」も、恋人からの贈りものかもしれない。

さらに住谷たちにとって「パンパン」は、「厚化粧、派手な服装、堂々と歩くおんなたち」といった固定概念となっている。とするならば、その逆の「薄化粧、地味な服装、うつむきがちでゆっくり歩く」おんなたちであれば、彼らにとって「パンパン」ではないおんななのであろうか。

次は、相手が「パンパン」であることを理解した上で、面談を行っている同研究所助手、望月<sup>わか</sup>嫩の描写である。

「煙草一本頂戴」。 馴れた手付で火をつけると美味しそうに鼻から煙を出す。まつ毛の長い美しい人だ。つやの消えた机をはき<sup>て</sup>始めてこの人達の生活を覗いた日の事である。はきはきした言葉遣い、態度の不敵さは始めて私の頬をあからませるがこの人々から見れば私など世間知らずのあわれな女位にしか思わぬことだろう（112）。

ここで望月の、下線部分に注目したい。住谷たちは一様に、「パンパン」とみなされたおんなたちの、外見のアンバランスを強調していたが、同性である望月は、「パンパン」を「美しい人」と描写する。ここで注意したいのは、望月の描写は、相手が「パンパン」であることをあらかじめ了解した上での描写であり、住谷たちの描写は、「パンパン」かどうかかわからないおんなたちを、「パンパン」とみなしていることにある。

このように、調査をおこなう側の職員である望月は、たとえ一瞬であったとしても、住谷たちの描写にはない視点があつた。すなわち、調査員である前に望月は、「パンパン」を「美しい」と感じたのである。望月のこのような感情は、当時の世間のおんなたちも感じていた<sup>6</sup>。また物怖じしないおんなたちを目の当たりにして、望月自身、「世間知らずのあわれな女」と彼女たちに思われているかもしれない、と感じている。

一方、住谷たちに限らず、日本のおとこたちがある特徴を有するおんなたちを、「パンパン」とみなし侮蔑する視線を送っていたのは、彼女たちの装いが日本のおとこたちに向けられたのではなく、彼らを打ち負かした勝者の国のおとこたちに向けられていることが許せなかったからではないか<sup>7</sup>。もしそうだとしたら、このような考えを前提としておこなわれた「パンパン」の実態調査は、あらゆるおんなたちの多様性や可能性、さらに彼女たちの抱える問題が、「パンパン」というひと言に切り縮められたり、あるいは不可視に

6 「パンパン」へのあこがれの視線については、茶園 [2006, 2014] を参照のこと。

7 彼女たちの装いが、たとえば、駐留期に積極的に「パンパン」批判をおこなっていた知識人、神崎清に向けられていたとしたら、それでも神崎のまなざしは変わらなかったのか、興味あるところである。神崎については、茶園 [2002, 2006, 2014] を参照のこと。占領期の「パンパン」への語られ方に早くから注目している論文として本論Ⅲで示した、古久保 [2001] がある。また、占領期・駐留期の「パンパン」をめぐるさまざまな言説には、本論で示した田中 [2011b] の他平井 [2014]、小説から分析しているものとしてモラスキー [2006]、占領軍将兵からみた言説を分析しているものとして笠間 [2012]、青木 [2013] が詳しい。

されて現在に至っているといえよう。

さらに住谷は調査対象になったおんなたちのことを、次のようにも述べる。

打てば響く若い女性としてのフレッシュな澁刺さを蔵し、虚無的、自暴自棄ながら、時々内省への閃きを見せ、好奇心も虚栄心もあり、経済生活の苦悩にたいして、身をもって打開しようとする意欲をもつものもあり、その欲望標準の高さにおいて、それぞれ異なっておる (26)。

この時点の住谷は、コンタクト・ゾーンにいる彼女たちに遭遇したといえるだろう。しかしながら次に示すように住谷は、従来の了解できる範疇で彼女たちのことを分析してしまう。

〔「パンパン」たちは〕活気の溢れる、澁刺、粗暴であるところに、その特徴が見られる。通常の女性にはもちろん見られる姿態ではなく、酌婦においても見られない。新しい第三の性格を、第三の女性の範疇を創り出しているのである。それは、単なる不良少女とか、犯罪型女性とかいう紋切り型の烙印を捺することはできないところの特異な女性群である (26)。

住谷が既存の価値観で彼女たちのことを分析したとたん、住谷は彼女たちとコンタクトできなくなってしまった。その結果、住谷は彼女たちに「特異な女性群」というレッテルを貼って了解してしまう。

それでは次章からおんなたちの語りを具体的にみていくが、その前にまず、研究所助手の小倉襄二が「オンリー・ワン」をどのように定義づけしているのかを示そう。小倉に限らず、さまざまな研究員たちが「オンリー・ワン」を定義づけしているが、ここで小倉の定義づけをとり挙げる理由は、本論で考察するおんなたちの語りの多くが、次に示す小倉の定義づけと対照的であるからだ。なお、他の研究員の定義に関わっている場合は、適宜引用する。

オンリー・ワンといっても比較的長時期 1 人に関係しており、次々と相手をかえてゆくのである。(中略) 交易〔金銭・物品の代償〕と乱淫から“その時々をゆたかにエンジョーイさせてくれる者”ならば相手として問題はない。ビジネスライクに遂行して貯蓄する例外者を除いて、公然と消費癖を自認するものなどもあって、多くは相手と関係する下宿の室代・食費・娯楽・服飾に費消されてゆく。無計画な生活軌道の驀進はいわゆる堅実な“更生”を決定的に困難にするのだ。彼女たちに将来の希望を問うても確答は得られぬ。彼女たちが足をあらひ結婚や正常の職業につくことがいかに困難であり破綻をきたしやすいことか。生活のプランを作るためには社会経済的インテレストがいささかでもなくてはならない。これは彼女たちには無縁のことらしい。

(102-103)

小倉のこうした定義のなかの、とくに下線部分に注目しつつ、「オンリー・ワン」ということばをめぐって、彼女たち自身の声に耳を傾けてみよう。

### III 下宿というコンタクト・ゾーン——「オンリー・ワン」と GI

本章では、「オンリー・ワン」とその交際相手の GI がコンタクトする下宿をコンタクト・ゾーンとしてみたときに、彼女たちの語りは、従来の分析枠組みで了解されていた語りとどのように異なっているかを、8つのカテゴリーに分けて考察する。

#### 1 交際相手からの「独立」を視野に入れるおんなたち

本節では、生活は保証されているものの、交際相手と将来別れた場合のことを視野に入れているおんなたち2名 (A、X) に注目しよう。

最初にとり挙げる A (21才) は、「生活は保証」(205) され「愛情で満足」(205) しているにもかかわらず、「独立」をほのめかしている。そのほかにも A は、占領期の米軍統治に関して注目に値する発言をおこなっている。

終戦後 (昭和 21 年 3 月に) [カトリック系の女学校専科家政科を] 卒業して2か月ほど家にいて、その頃、学校からの紹介で東公園の〇〇〇〇のタイピストとして勤めました。給料は月 370 円で、そのころとしては良い方でした。その〇〇〇〇は技術〇〇〇で、タイピストとハウスメイドだけは日本人宿舎に入れました。その時は 12 人ほど女子が寄宿舍におりました。〇〇〇〇の事務所で働いているうち、W という〇・〇と知り合いになり ×××× に住み込んで同棲しました。室が二つあって、オンリー・ワンと認められれば、その隣りに住めました。その〇・〇は、電信、電気の技師であり、建築技術もでき、タイプも教えられました (204-205)。

A は生まれも育ちも福岡市で戦後、占領軍関係のタイピストとして九州の基地で働いていた。A は当初、日本人寄宿舍にいたところ、「W」と同棲することになった。ここで注目したいのは、下線部分である。おそらく文中の「××××」というのは、「W」の住んでいる宿舎のことを指す。とりわけ注目したいのは、「オンリー・ワンと認められれば」という部分である。誰が、A を「W」の「オンリー・ワン」と認めるのだろうか。

通常、GI の宿舎は、軍の厳格な管理のもと運営されている。したがって、「W」が A を「オンリー・ワン」と認めたとしても、宿舎の権限を握っている上層部が認めなければ、A は「W」の宿舎で同棲することはできない。さらに、少なくとも A のいた九州の基地では、「オンリー・ワン」と認められたおんなたちは、すべてパートナーである兵士の「隣り」に住めたということになる。とすると、A の所属基地では、宿舎の権限を握る上層部が、GI とその「オンリー・ワン」のおんなとの同棲を認めていたということになる。この文脈を踏まえると、A は「W」と正式に婚姻関係を結ばなくても、「妻」と同等の扱いを受けていたということになる。もしこれが事実だとしたら、思い切った「措置」

である。

というのも当時、GIに性病をまき散らすとみなされたおんなたちに、強制的に性病検診を受けさせるべく、日本各地でMP (Military Police, 米軍の警察) と日本の警察当局によるキャッチがおこなわれていて、性病をまき散らす元凶になるかもしれないおんなとの同棲をGHQ側が簡単に許すとは考え難いからである。

その後「W」の京都への移動に伴って、Aも福岡から京都にでてきて、「W」に岡崎で部屋を借りてもらうことから、京都では「W」の宿舎で同棲することは認められなかったといえよう。

「私は現在Wとの生活に愛情では満足しております」(205)、「時が来てWと別れることがあれば、その後は独立して生きてゆくつもりです。彼は、私の最初で、そして最後の人と思っております。独立といっても長女として弟たちの面倒も見なければなりませんから、貧困には堪えて行けると信じております」(205)と語っていることから、Aは「W」と結婚できなかった場合、他のGIを探すことを考えていない。この点が小倉が述べるような、「オンリー・ワンといっても比較的長時期1人に関係しており、次々と相手をかえてゆく」(102)イメージからAは遠い。

次は、Aと同じく「生活は保証されている」(267) X (19才) をみてみよう。彼女は「パンパン」と呼ばれることを忌避している。

生活は保証されているが、Tが逢いにくる日のほかは、退屈であり、宿のおぼさんの手伝いしたり、買い物と一緒にいたり、宿の小さい子供の相手になって遊んだりしている。道を1人で歩くとパンパンだなどと呼ばれそうなので、外出するときは、いつも宿のおぼさんと一緒に出ることにしている。××と結婚することは困難であるし、将来どうなることか心配である。なにか手芸を覚えて、勤めて自活したいと思っている。このままズルズルの生活をしていると、度々キャッチされるのがいやだし、私は性病はないのに、このように、しばしば、何日何時キャッチされるかわからないから、毎日、検診に出頭して、病気がないことの証明書をもって、安心して日々の生活をしたい(267)。

Xの場合、「パンパン」であることを自認して「パンパン」と呼ばれたくないのか、あるいは「パンパン」ではないのに間違えられたくないために「パンパン」と呼ばれたくないのか、この口述だけでは不明である。ただ先に述べたAの語りとの違いは、XもA同様「生活は保証されている」(267)にもかかわらず、下線部分に注目すると、「T」との生活は、「ズルズルの生活」だとXは感じている。「私は結婚できないと言ってやった」(266)と語っていることから、Xは「T」からプロポーズを受けていることがうかがえる。何をもって「結婚できない」のかXは語っていないが、将来のことを考えてXは、自活する道を考えている。だからといってXは、Aのように「彼は、私の最初で、そして最後の人」とは言っていないので、手に職をつけて、交際相手と対等なつきあいを模索しているのかもしれない。そしてこの点も、小倉が述べる、「無計画な生活軌道の驀進」

という生活にXはあてはまらない。

## 2 仕事を続けるおんなたち

本節では、GIと交際しながらも、仕事を続けているおんなたち2名(B、V)に注目する。彼女たちは仕事を続けている点において、「街娼においては生活史の上から見ると、ダンサー・タイピスト等、比較的収入の大なる前職業から転落した者が多く」(80)と述べる、京都大学医学部精神科教室の萩野恒一、鈴木義一郎、杉本直人たちの見解と異なっている。彼女たちは、仕事を続けながらGIと交際しているからである。また、小倉が述べる、「無計画な生活軌道の驀進」にも該当しない。彼女たちはいずれも自らのことを、「オンリー・ワン」と述べている。

まず、1年半ほど交際し帰国してしまった元彼から紹介されたおとこと交際しているB(23才)の口述をみてみよう。Bは、ダンサーの仕事を続けている。

東山ダンスホールで知り合った〇〇と親しくなっていて、交際をつづけていたが、1年半ほどしてその〇・〇が帰国したので、その紹介によって、現在の〇〇、58歳ほどの△△をオンリー・ワンとして交際を続けている。ダンサーとしての収入は最初のころは月4千円、現在は7千円か8千円ほどである。(中略) 〇・〇からは月々、日本貨で補給として必要なだけもらっている(206)。

138

Bはダンサーの収入で足りない分、交際相手から日本円で必要経費をもらっている。次に述べるV(34才)は、ダンスホールと喫茶店と両方かけもちで働いている。

ダンスホールで〇〇と知りオンリー・ワンとして交際をつづけていたが、〇〇は本年(24年)1月3日に〇〇〇〇へ帰国したので、京都へ来て、Hダンスホールへ出て四条の喫茶店にも勤め、現在の宿に下宿しつつ通勤していた。オンリー・ワンとして同棲した。〇〇からは、月1万円ほどもらっていた(261)。

Vは父が行方不明で、継母(実の母が亡くなった後に来た母親)に仕送りをして養っている。また、〇〇が帰国して、新たに別の〇〇の「オンリー・ワン」となり、仕事を2つかけもちしている。この理由についてVは何も語っていない。

## 3 家族を援助するおんなたち

本節では、交際相手からもらう金の一部を家族に援助しているおんなたち3名(G、I、P)に注目しよう。

まず交際相手のことを「オンリー・ワン」と述べるG(17才)をみよう。Gに限らず本論でこれからとりあげるおんなたちのなかには、交際相手のGIのことを「オンリー・ワン」と述べている者がいることは、特筆すべき事柄である。交際相手を「オンリー・ワン」と呼ぶ認識は、研究所員たちの認識と真逆である。

Gの場合、交際する手段として事前に英語を「練習」したり部屋を借りたりするなど、口述記録では最年少ながらも、交際相手を獲得するための計画性の高さが注目に値する。

〔内職の収入では〕お金が足りないため、〔友人にパンパン・ハウスへ連れて行かれ〕去年12月から〇〇と関係しました。(中略)あとで自棄気分になり、〇〇と交際する気になり、英語を練習し室を一室借りました。友人に紹介された〇〇をオンリー・ワンとし、室代は100円支払い、自分の手には500円とりました。(中略)お金やいろいろの物をもらうのが1か月7千円から8千円で、そのうち2千円を母へ送金しています(224)。

生活のために「パンパン・ハウス」で働いていたGは、「〇〇と交際する気になり」英語を学び、部屋を借りて事前準備をおこなっている。その後、友人の紹介で交際相手を見つけられていることから、計画的に交際相手を獲得していることがわかる。交際相手を獲得するために英語を練習し、交際相手からもらう金の一部を母に送金しているGの生活も、「無計画な生活軌道の驀進」とは言い難い。

次に交際相手に弟の学費を出してもらっているI(21才)の記述をみてみよう。Iは、弟から「パンパン」と呼ばれている。

そこ〔東京〕で親しい〇〇が出来たので、その人が転勤で京都へ行くことになり、それについて入洛したのです。(中略)彼は愛情ますますこまやかになり、結婚する意思を示し、私は彼への恩義とも言うべき意味で22年2月11日に遂に身体を許しました。(中略)弟は最初、パンパンをするなら学校をやめるといっていましたが、最近では〇・〇に感謝しながら通学しています。〇・〇は一ヶ月おおよそ2万円位くれます。服、菓子等を持って来てくれるし、又日用品等は、彼の家から送って来ます。(中略)弟の事だけ考えています。学校を卒業して一人前となった時、私は死んでもよいと思います(239)。

Iが交際相手の求婚に「恩義」で応え「身体を許した」のは、Iの弟の学費を交際相手から援助してもらうためである。Iは弟が一人前になったら、「死んでもよい」と語っている。この点に注目すると、大塚が言う、「彼女らの生活の根底をなす性行為は、愛情を伴わぬものであり、金のためであり、極めてすさんだ性行為であるがゆえに、いきおいその心情を荒くし、心情の荒廃は逆に放縦な性生活に油を注ぐ」(94)ような性生活を、Iがおこなっているとは言い難い。

Iの、「弟の事だけ考えています」、「私は死んでもよい」という語りに注目すると、Iは交際相手に対して「恩義」を感じていても愛情を伴っているとは言い難い。だからといって大塚の言うような「放縦な性生活」をIが送っているとも考え難い。というのも、「放縦な性生活」が原因で交際相手との関係が壊れることは、弟の学費を援助してもらうといった「経済的援助」の基盤を失うことを意味するからである。

「恩義」を感じながら結果的にIは交際相手から金を引き出しているが、Iにとって「恩義」と「経済的援助」は、交際相手にとって「愛情」と「経済的援助」であり、両者の間には複雑なズレがみられる。

特定のおとこと交際するP(19才)は自らを「オンリー・ワン」ではなく、「パン助」と名乗っている。

友人に紹介されて22才の〇・〇と知己になった。そして全く金のために本年6月に初めて関係した。それ以後一週間に3回くらい関係し1か月約1万円、衣服等をくれるので大体やっていける。(中略)今のところ堅気になってパン助をやめる心算はない(254)。

Pは2人の弟と父母を養う必要があり、「父母は私の現在の仕事を心配し反対しているが、自分が稼いで金を出さねば暮らしていけない」(254)と、交際する動機が明確である。家族を支えるために「パン助をやめる心算はない」のであるから、研究所長の竹中勝男が、「彼女らはこの時代の苦悩の中心に生きながらその苦悩を回避しつつ自暴と自棄におち、ただ無目的な反抗と破壊と放浪のその日に生きる社会的放心者である」(11)という「パンパン」のイメージから、Pは遠い。

#### 4 揺らぐおんなたち

本節では、金のために交際していても、割り切れないものを抱えているおんなたち3名(J、M、O)の口述をみてみよう。  
まず、自らを「パン助」と述べる、J(27才)を紹介する。

相変わらずパン助をやっているのです。(中略)今私と同年の28才〔数え年〕の指輪工場をやっている人と結婚する心算で、8月27日に式を挙げる予定です。その事もあり現在つきあっている〇・〇は2か月で帰国しますので、それまで金を作って、それ以後きっぱり止めてしまいます(242)。

Jは性病対策にも用心深く、「パン助をするとき、性病の恐ろしさをしていたために必ずサックを使わし1度として、ペアでやったことはありません。また看護婦にきいてからは、薬で消毒することも知り、それも実行しましたのでいままで6回キャッチされましたが、1度も病気のあったことはありません」(242)と、性病にかからないように気をつけていることや、「パン助をして〇・〇に対しては全く不感です。今度結婚する人にはキスだけでもボーッとする位ですのに」(243)という発言に注目すると、〇・〇との交際は結婚資金を準備するための金で割り切った関係であると思われる。

ところがこの調書がとられた翌日の1949年3月1日にJはキャッチされ、病院の診察で妊娠していることがわかった。「あの〇・〇さんと遂に気を許して、サックなしでやったため」(243)だという。性病にかからないように「サック」と「消毒」を徹底し、結婚

相手と「楽しい愛の家庭を持ちたい」(243)と語っていたJの行動は、たとえどんなに金のためと割り切っていたとしても、「遂に気を許して」しまう瞬間があることを示している。

Jと同様、結婚するつもりのない交際を続けているM(27才)の発言をみてみよう。Mは自身のことを、「オンリー・ワン」とは言っていない。

六畳一間千円で下宿しているのですが、やはり辛い生活です。1か月およそ2万円位はくれるし、色々の品物も持って来てくれますが、8千円以上で雇ってくれる職があったら、現在の生活にあっさりおさらば致します。(中略) □□□□人と結婚しようなどという気は全然ありません。つきあって一緒に寝ていれば、自然に情がうつるのは当然のことですが (247-248)。

3年間の結婚生活を送った後「故あって離婚」(247)したMは、キャバレーのダンサーをしていたこともある経歴の持ち主である。ここで下線部分に注目したい。下線のMの語りから、小倉が「ビジネスライクに遂行して貯蓄する例外者」(103)と表現するような、たとえ恋愛感情を一切含まない金銭目的のみの交際であったとしても、GIと交際を続けていくうちに次第に「情」が移る、おんなたちの心の揺れが垣間みえる。この心の揺れに注目すると、相手が金だけの売春相手なのか、恋愛感情をともなった売春相手なのかという境界すら揺らぎがでてくるし、この揺らぎは古久保[2001:13]が、「街娼という範疇とアメリカ兵と交渉をもつものという範疇の境界の曖昧さが存在している」と指摘する曖昧さでもある。

最後にO(18才)の、交際相手との複雑な関係をみてみよう。Oは自身を「オンリー・ワン」と言っている(254)。

彼は毎日下宿へやってきます。(中略)1か月におよそ5千円しかくれないのですが、服装、食糧等をあわせれば1万円くらいになるでしょう。下宿代には500円とられます。最初の愛人のために借金がありそれを返し終えたら今の生活はやめる心算ですが、男を変えてまで、ついでなのは、行為そのものが好きなのかも知れません。自分にもよくわかりませんが。(中略)[○○○○人と]矢張り別れて日本人の真面目な24、5の人と結婚したいと思います。(254)

Oの借金返済とは、「処女を捧げ」(253)た「愛する○・○」(253)との交際のときの借金である。借金を返済したら、「今の生活」をやめ、真面目な日本人との結婚を希望していることから、借金返済のために現在の「彼」と交際していることになる。

このOの語りには、GIとの複雑な関係が存在する。まず、交際相手がOに渡す金は、Oがかつて愛したGIとの交際でできた借金返済に当てている点において、交際相手はOに利用されているともとれる。次にOにしても、「最初の愛人」に利用されていたかもしれない。というのも借金返済の原因になった「最初の愛人」は、Oのことがた

とえ大切な存在であったとしても、(Oに借金があることを知らなかったにせよ) Oに借金を残し帰国した点において、結果的に「愛を名乗ることで契約金などを払わずに」[田中 2011b:201] Oを専属「オンリー・ワン」にすることができたからである。そしてOの「最初の愛人」も、目下の交際相手も、ともにGIである。

さらに下線部分に注目すると、O自身もよくわからないと述べているように、交際相手との関係を、金だけの関係とは言い切れない、Oの心の揺らぎが垣間みえる発言である。

## 5 日本のおとこと関わったおんなたち

本節でとり挙げるおんなたち2名(S、T)は、GIのみならず、日本のおとこたちとも関わったことのあるおんなたちである。

父が病気で仕事ができないという経済的事情と継母との折り合いが悪いという状況が重なって、遊郭に身売りされたあと遊郭を転々とし、最終的に大阪飛田遊郭で働いていたという経歴のS(23才)の語りをみよう。

終戦のときの20年の秋、当座はそこ〔飛田遊郭〕へも〇〇が来ました。そこで〇〇とつきあって廓をやめてオンリーになって吹田の××××で一室を占領して2年間一緒にいました。必要品はすべて備えてくれましたから困りませんでした。(中略) 日本人と結婚しようとも思っていない。将来も結婚しようとは思っていません (257-258)。

Sは貴重な発言を2点おこなっている。1) GI専用の慰安施設の設備が整うまで、GIたちは遊郭を利用していたということや、2) Sが交際相手とつきあって遊郭をやめることができたということである。1)については、当時、人身売買で遊郭に売られてしまい、なかば監禁状態で性奴隷として働く彼女たちにとっては、金回りの良い戦勝国のおとこたちの目に止まることは、性奴隷から抜け出せるチャンスを意味している。2)は、交際相手がSを身請けしたことが考えられる。1)と2)の状況を踏まえるとSの場合、戦勝国のおとこに身請けさせる能力の持ち主だといえるし、「オンリー・ワン」のおんなたちのなかにはSのようなおんなたちも多くいた可能性を、Sの発言は示唆している。

さらに下線部分に注目すると、Sが日本人と結婚しようと思わないのは、遊郭を転々としていくなかで、日本のおとこたちに失望したのではないかと思わせる発言である。

次にとり挙げるT(18才)の発言は、「堅気」になって日本人と結婚したにもかかわらず、日本人と離婚したケースである。彼女は、「オンリー・ワン」とも「パンパン」とも言っていない。

大阪のキャバレーのダンサーになりました。派手な、華やかな生活に憧れたからです。月収は約1万円でしたが、知り合いの〇・〇が同棲をすすめるので、22年の4月にキャバレーを退き、北河内の下宿で同棲しました。その〇・〇さんは19才。知り

合ってから約2か月で、初めて関係しました。私は17才〔実年齢〕で、処女ではなくなったわけです。好きな人にチェリーを破られたのですから何でもありません。同棲する内に妊娠してしまいましたが、2か月で流産してしまいました。その人は22年12月に帰国してしまいました。23年5月友人のすすめで舞鶴に行き、20才の〇・〇を世話する事になりました。(中略)下宿を東舞鶴に持ち、週2回関係が続けていました。彼は大変可愛がってくれました。(中略)友人の紹介で、23才の〇・〇を知り、時々関係する様になりました。しかし、こんな生活は、辛いし、いやですので、堅気になろうと思い23才の日本人と結婚しました(258-259)。

その後Tは結婚相手が「バクチ打ち」(259)であることがわかり離婚し、「服をもう少し作れば、錦を着て故郷に帰るべく、足を洗おうと思います」(259)と述べていることから、日本人と離婚した後、GIと割り切った交際を感じさせる発言をしているが、Tの交際遍歴を追うと、そうとは言い切れないものがある。

まず、Tの最初の交際相手との関係は古久保〔2001:13〕が指摘しているように、「性交を売るだけの売春婦」ではなかったと考えられる。というのも、Tにとってこのときの交際相手は、Tが「チェリー」を破られても何でもないと思えるほど「好きな人」だったからだ。結局、「好きな人」とは結婚に至らず、交際相手は帰国してしまった。

次にTは、舞鶴で「大変可愛がって」くれた別の交際相手ができたが、喧嘩別れをしている。喧嘩の原因は、晩ご飯の「おかず」だった。

Tはその後、「23才の〇・〇」と、「時々関係する」に至る。こうして、「こんな生活は、辛いし、いや」と感じ、日本人と結婚したものの、日本人の夫とも結婚生活がうまくいかず別れたあと、夫から「淋病を感染させられた」(259)。

すなわちTは、GIと交際するのが辛いので「堅気」になろうと日本人と結婚したにもかかわらず、日本人の夫とも円満ではなかったのである。結婚相手が性病に罹患していたということは、結婚相手は「乱淫」していた可能性もある。そのおとこと離婚したのち、「服をもう少し作れば、錦を着て故郷に帰るべく、足を洗おうと思います」という言動を、Tはおこなうようになったことを考えると、GIだけでなく日本のおとことの複雑な関係が垣間みえ、GIと割り切って交際しているとは言い難い。

日本のおとこたちとの関係性はどうかを視野に入れることなく、GIと交際するおんなたちの研究調査をおこなってしまうと捨象されてしまう事柄があるということを、本節でとり挙げたSやTの語りは明らかにしている。

## 6 レイプ被害に遭ったおんなたち

本節でとり挙げるおんなたち5名(K、W、E、F、Y)は、レイプ被害にあったおんなたちである。先にとり挙げる2名(K、W)はともに、処女の時GIにレイプされた経験をもつ。彼女たちをレイプしたおとこと交際相手とは違う人物だが、どちらもGIであることは共通している。この場合、日本人にレイプされた場合よりも、軍服や容姿等で明確に交際相手にレイピストを連想する可能性が高いことを考えると、GIと交際しようと

は思わない「はず」である。軍服を着ているおとこたちを目撃するたびに、レイプされた記憶がフラッシュバックされる危険性があるからだ。

しかしながらこれからみていく K と W は、そうではなかった。

戦後「看護婦」として働いていた K (21 才) は、1946 年 3 月仕事帰りにレイプされた。

例のごとく紺色の制服風の地味な服装、髪もパーマメントなんかはかけず、質素な様子をしていたのですが、午後 9 時頃、職場を出てしばらく行った所で、○・○ 2 人に無理矢理に引っ張られました。叫び声を出して暴れましたが誰も気がついてくれません。ある家に連れ込まれ 2 階に引き上げられました。その家の小母さんも、救ってはくれません。清浄な処女の身体を散々に蹂躪され、辱めを受けました。(中略) 相手の○・○は、18、9 才の男でした。(中略) 強姦されて以後、父との間面白からず、21 年 8 月遂に喧嘩家出をしてしまいました。父は潔癖で、K・K 会館から籍を抜いてしまいました (245)。

K の口述から、たとえ派手な身なりをしていなくても、おかまいなしにレイプされた状況がうかがえる。そして下線は、K が「K・K 会館」で「看護婦」の仕事が続けられなくなったことを意味する。「潔癖」な K の父にとっては、GI からレイプされたこと自体、娘 K にレイプされるだけの落ち度があった許し難いことなのであり、そんな娘が「看護婦」の仕事続けるのは、「恥」をさらすことになる、というのだろう。すなわち K は性暴力を被って心身ともに傷ついているにもかかわらず、性暴力被害を「恥」だと「潔癖」な父から責められていたのである。

その後 K は「あちらこちら、○○を漁り、稼ぎました。12 月には家に帰りましたが、依然として○・○相手の商売はやめませんでした」(245)、と述べていることから、レイプでの心の傷は、父の態度でさらに深い傷となり、「○・○相手の商売」を始めるに至ったことがうかがえよう。

こうして K は、GI たちの施設と思われるところで、「月給 4 千円のウエートレス」として働き始める。

「現在 1 人の愛する○・○があり、国に帰省中ですが、結婚申請中で、来年 1 月には帰洛してくれる由、私はそれを待っています。その人と結婚するのが最大の希望」(245) と述べる K の語りからわかることは、レイプされ救いを求めても、誰も助けてくれず実父からも助けてもらえなかったこと。そんな K に結婚を前提とする交際相手があったこと。

その相手が日本人ではなく、レイプしたおとこ同国のおとこであったことである。結婚申請中の K は、自身を「オンリー・ワン」と言っていない。

次に紹介するのは、W (17 才) である。彼女も病院関係の仕事をしていた。

岡山病院で外科の見習いで勤務していましたが、23 年 8 月に、ある日、帰宅が遅かったのですが街を歩いていると、○○が 2 人歩いて来て突然、つかまりました。大声を立てたらハンケチを口の中にねじこまれ、闇の横道につれて行かれて、強姦されまし

た。私は、処女をやぶられたおどろきとかなしみで、そのまま闇の中に1人で2時間も座ったまま泣いていました。それから家へ帰って叔母に全部をありのまま語ったら、叔母に怒られ、お前は1人で自活しろというので、私は家出しました(263)。

Wの場合も、K同様、レイプされたことを叔母に語ったにもかかわらず、叔母は怒り、Wの心に傷を負わせてしまうようなことをしている。しかもWの場合は、同性である叔母からレイプされたことを責められたのである。その後Wは、東京の知人の世話で食料品会社に勤め、友人に紹介された22才の「〇〇」と知り合い、「オンリー・ワン」の生活につく。

「私は将来のことは、何も考えていません。今の〇・〇は、私をはじめで知った恋人であり、私は日本人を恋した経験はなく、今のオンリーとでも結婚のことは考えていません。いよいよとなれば、岡山の国元にかえって農業をしようと思っています」(264)と語るWは、K同様に、レイプされたトラウマに加え、叔母からセカンドレイプともいうべき仕打ちを被ったトラウマを、日本人ではない交際相手と一時的に交際することによって解消しようとしているようにみえる。

KやWに共通するのは、レイプという被害を被ったにもかかわらず、父や叔母といった家族や親戚から、レイプされたのは本人の落ち度であると言わんばかりの仕打ちをされていたことや、そんな彼女たちが「愛した人」が、レイプした相手と同国のおとこたちだったということだ。

一方で、彼女たちが「愛した人」とレイプした相手は、肌の色が違う場合も考えられる。人種の観点からみていくと、たとえ同国であっても肌の色が違っていたため、レイピストを連想せずに相手を楽しむことができたのかもしれない<sup>8</sup>。

またWは、交際相手を「オンリー」と言い、自身を「オンリー・ワン」と言っている。次にみる3人(E、F、Y)は、レイプされたことを家族が知っているかどうか不明のケースである。EとFの語りは、レイプと金結びについている。そしてこの3人は、交際相手を「オンリー・ワン」(E、Y)、もしくはonly one (F)と言っている。

まずダンサーE(19才)の語りをみてみよう。

午後6時頃、友人と2人で梅田駅のところを歩いていたら、車が来て、突然止めて、私ら2人を車に乗せ手で私の目を隠して、どこか方々を走ったようであったが、どこかホテルに連れて行った。どの辺か場所はわからなかった。

室で無理に強姦されたが、こうしたことははじめてであった。それから、また車に乗せられて、元の梅田駅の前につれ戻されたが、そのとき泣きながら、友人の家に行った。その時、その友人は何も言わなかったが、あとで友人もその時、私と同じような目に逢っていたのであった。

8 軍服と人種の関係について、今後詳しく考察する余地がある。

何も知らない私は、〇・〇にお金のことなど言うことも知らず、そんなことは言えもしなかった。〇〇の奥さんが、ボーイフレンドを紹介してやろうというので若い〇〇を紹介され、交際をはじめ、その主人と夫人とボーイフレンドと私と4人で、方々に散歩していた。(中略)ダンサーになって心齋橋Iキャバレーに出た。その〇〇をオンリー・ワンとして交際していたが、ダンサーとしての収入は、10日に3千円ほど、月に約9千円であった。(216)

下線部分に注目すると、Eは歩いているところを拉致されてレイプされたことがわかる。さらに、「こうしたことはじめて」、「お金のことなど言うことも知らず」という語りから、Eと一緒に歩いていた友人のようにいきなり拉致されてレイプされたおんたちが存在していたことや、たとえレイプであっても性行為に至った場合、相手から金を要求していた状況が浮かび上がる。

その後Eはダンサーになるが、「オンリー・ワン」として交際を続ける一方でダンサーとしての収入がかなりあることから、ダンサーの仕事をEは堅実に続けているということになる。このことからEの場合、交際相手に全面的に経済的な援助を受けているわけではないことがわかる。さらにEの場合、交際相手のことをどのように思っているのか、語っていないことも注目に値する。

Eの語りには調査員が附記として、「知能程度低く、英会話多少出来る」(217)とある。だがEの口述記録だけでは、知能程度の高低はわからない。実のところ、レイプのショックがいまだに大きいため、知能程度が低いとみえるのではないか。

次に、ダンサーF(21才)の語りをみてみよう。Fの場合、レイプ加害者と交際している。

キャバレーでダンサーをしているうち、S町の〇〇〇〇の〇〇と知り合いになったが(中略)キャバレーの帰りにホテルにつれて行こうというので、ついて行ったら、そこはどこの旅館で、そこで無理やりに貞操を奪われた。そのときはそうしたことでお金などをもらうことを知らなかったし、もちろんお金をもらわなかった。その後、経済的に困ったときは、その〇〇からお金をもらって関係をつづけてきた。

〇〇は、京都の〇の〇〇〇の〇〇〇〇で門衛をしているので、自分も京都へ来て現在のところで、その〇〇をonly oneとして交渉しつづけている。(中略)平素から病気に注意し、日赤に時々行って診察してもらっているので、現在も病気は持っていない(223)。

下線部分に注目すると、Fは相手に「ついて行った」ので、Eのように見知らぬおとたちから目隠しされ拉致されたわけではないものの、Eと同様に「無理やり」レイプされていることがわかる。そしてE同様、このような事態に陥ったとき、金をもらうことを知らなかったと言っている。EとFの語りから共通することは、先にとり挙げたKやWのケースのように、レイプ被害を訴えたところでセカンドレイプになることを認識したお

んなたちの抵抗として、レイピストに金を要求したのではないかと考える。

さらにF自身の語りはE同様、交際相手のことをどのように思っているのか不明である。とりわけFの場合は、無理やり貞操を奪った相手が交際相手である。Fもダンサーを続け、交際相手に全面的な経済援助を受けているわけではないことや、性病にかからないように自己管理をおこなっていることを明らかにしていても、どのような心情でレイプ加害者と交際を続けているか不明であるし、レイプされたトラウマについても語っていない。謎は残されたままだ。

Y (19才) は、「銀行員」に「処女をやぶられ」た3日後にキャッチ被害に遭った。

はじめて男を知ったのは18才〔実年齢17才〕で、相手は銀行員でした。その動機は、学校友だち2人と男3人でキャバレーに遊びに行き、その夜、ホテルにつれて行かれ、(中略)何もしらないうちに処女をやぶられました。その3日後にキャッチされました。そのときはトラックで大勢がキャッチされたときでした。(中略)友に紹介されて〇・〇と知り合いになりました。英語は友だちに教えられて、少しは書けるようになり、〇〇とは4か月何もなかつきあいました。その〇〇は日本語もわかっていたし、日本字も書けました (267-268)。

Yはその後妊娠するが、スケートでひっくり返り流産してしまい、交際相手からわざと流産したと誤解を受けて別れてしまう。次に交際した相手の子を妊娠するが、今度は交際相手が持って来た薬を飲まされ流産する。薬を飲ませた交際相手のことをYは嫌いだったので、交際相手から逃げるが追い回されたという。その後4人のGIと「日をきめて」(268) 同時に交際したが交際相手が「ハチあわせて」(268) ケンカをしてしまい、「いまは1人を相手にしています。1か月3万円ほどの収入があって、どうやらやっていけるので、いまのオンリー・ワンは〇〇〇〇人で大津の××××にいる〇〇です」(268) と語る。さらに「好きな人があれば日本人と結婚したい」(268) というのが、Yの全体的な語りである。

Yの初体験の相手である銀行員は、おそらく日本人であろう。下線部分に注目すると、「処女」をやぶられたこととキャッチとで、Yは短期間に性暴力被害に2回遭っている。その後、2人のGIとの間に出来た子をそれぞれ流産したあと、別の4人との交際を経て、「オンリー・ワン」として交際している。この語りの背後にY自身、相当なトラウマを抱えていると推測する。Yの語りも、前述したダンサーの仕事をしているE同様、調査員が附記として、「知能程度中以下」(268) と明記している。

平安病院の医師榎本貴志雄も、説明がつかなければ、「精神的要素」に彼女たちの言動の原因を求めている。

特に「生計策」なのに「好きで」転落して売春業に「満足」している者には、前記のコース〔「父母がない」「家庭の失職」・「夫の離別」等「社会的原因」〕があてはまらず、その原因は精神的要素〔「意志薄弱放縦性」「性道徳の消失」「性知識の欠如」〕に

求める外ない (46)。

レイプされたおんなたちは、レイプされたことがトラウマになっていたかもしれない。だが、本節でみてきたおんなたちは、トラウマを考慮されていなかった。とくに E と Y の語りは調査員には了解できない語りだったため、「知能程度」にその要因を求めることで、了解されてしまった。

研究員の大塚は、「オンリー・ワン」のことを次のように語っている。

その〔「オンリー・ワン」の〕最も初期のものとして、生活様式を異にするフェミニスト達の親切さに簡単に参ったインテリ女性達がある。その中には、彼の贈り物をもってその愛を全く保障されたかのごとくに思い、唯一人の情婦であると自負して国際結婚すら夢みるコスモポリタンもいる。しかし、相手の帰国、他の女への手出し等によって、彼女達の愛情は嫉妬に変わり、憤怒となって、やけくそで他に相手を求めてオンリー・ワンとしてつく。1回・2回とそんな事が繰り返されて、しまいには全く愛情を失った金みのバタフライを開業する段階に至る。オンリー・ワンの場合、その愛情は初期においてすら大体純粹なものでも根本的なものでもなく、自己弁護、自己欺瞞の道具のように思える。相手が発散する対人感情が愛情とは違うのに、愛情の発露だと思う錯覚もある (92)。

148

レイプされたことを打ち明けたことが原因で、家族や親戚から絶縁状態になってしまった K や W の心のよりどころが GI たちであったことを考えると、大塚の下線部分の解釈と K や W の語りは異なることになる。K の交際相手は結婚申請中の「1人の愛する○・○」であり、W の場合、交際相手は「はじめて知った恋人」であるからだ。

また、拉致されレイプされた E、レイプの加害者と交際する F、不本意なかたちで「処女をやぶられ」、2度も流産を経験したのち複数と交際し、最終的に1人の GI と交際している Y の場合も、大塚の下線部分の「自己弁護、自己欺瞞の道具」というように、彼女たちのことを単純化することはできない。

大塚は、「彼女等の生活の根底をなす性行為は、愛情を伴わぬものであり、金のためであり、極めてすさんだ性行為であるがゆえに、いきおいその心情を荒くし、心情の荒廃は逆に放縦な性生活に油を注ぐ。この相互作用が、生活をいよいよ常規から遠ざけ、頽廢の度を強め、人間性を歪曲させる」(94)と述べる。大塚の目には GI たちと交際するおんなたちが、ただ「金のため」に「極めてすさんだ性行為」をおこなっているとみえるのだろう。

GI からレイプされ、勇気を持って家族に訴えたにもかかわらず、家族からも拒絶されてしまったおんなたちが他にも大勢いるとしたら、また、レイプされたことを訴えても受け入れてくれないことを知って、金を要求することでレイプに対する抵抗をおこなっているおんなたちが大勢いるとしたら、大塚のみならず、GI たちと交際するおんなたちに批判的なまなざしを向ける人々は、それでもなお彼女たちに非があると言うのだろうか。

本節でとり挙げたおんなたちは、自らレイプされた過去を調査員に語った。だが、彼女たちだけがレイプ被害に遭ったわけではない。彼女たちの語りの背後には、レイプされた記憶を語れずにいる大勢のおんなたちが存在することを、わたしたちは気に留める必要がある。

## 7 家を所有するおんな

不動産を所有しており、交際相手と結婚を希望している H (20 才) をみてみよう。H は自らのことを、とくに「オンリー・ワン」とは述べていない。

〇〇とお金を半分出し合って、25 万円で大阪にちょっとした小さい家を建てましたが、兵隊は天津市の〇〇〇〇に転任になったので、私は大阪の方の家をキャバレーの友人に貸して、家賃を月千円ずつもらうことにして、私は京都へ逢いに来て熊野神社の近くに泊まっています。(中略) 〇〇の〇〇と結婚できるなら結婚したいし、現在の生活に満足しています。しかし〇〇〇が帰ったあとのことを考えると不安になります。(中略) 自活するとすれば、英語を使うような仕事 (225)。

H は、交際相手と折半で家を建てていることから、交際相手に経済的にすべて依存しているわけではない。さらに、「第 2 人に月々 5 千円を仕送りし、そのほか必要なものは買ってやります」(225) と、家族を援助している状況にある。また、交際相手と別れた場合も考えて、自活することも視野に入れている。この H の状況は、住谷が述べる、「前途のことを考えないで刹那的な、享樂的な浪費に快感をむさぼる」(16) イメージとはほど遠い。

## 8 自分の意見を言うおんな

GI と恋愛することについて、自分の意見を述べる Z (21 才) を紹介しよう。Z 自身、自らを「オンリー・ワン」とは述べていない。

今度交際している〇〇は P さんという〇〇〇〇の 22 歳の兵隊で、四条松原の下宿へ、日曜と土曜に来ます。たいがい午後 9 時頃帰ります。チューインガムやチョコレートやキャンデーなど菓子を持って来てくれますし、ビールを飲んだり、ダンスをしたりして遊びます。(中略) 朝は 7 時半ごろ起き、食事は 3 度、自炊し、御飯は自分で炊いて、おかずは宿の人と一緒にします。(中略) 1 か月 6 千円ほどの収入です。必要なものは〇〇にもらいます。(中略) 世の中の人は〇〇と交際するのをすぐ悪いように言うのはひらけていないと思います。〇〇と恋愛するのにわるい理由はないと思います (220)。

Z の 22 才の交際相手「P さん」は、午後 9 時に帰ることや、Z に渡す金が 6 千円であることを考えると、おそらく階級の低い兵士であると思われる。Z の食事はすべて自炊で

賄っており、堅実に暮らしている。また当時配給制で物資が欠乏していた日本においては、「ビールを飲んだり、ダンスをしたり」できる Z は、GI との接触がない日本人にとっては、はるかに恵まれているおんなにみえるかもしれない。しかし、養父母と折り合いが悪く家を出て暮らしているにもかかわらず、ときには養父母に「仕送りをする」(219) Z と、異国の地での厳しい軍の規律の範囲内で、週 2 回土日の夜 9 時までのデートを楽しむ「P さん」の交際は、Z が述べるように、「わるい理由」は、みあたらない。「“愛人を愛することが何で悪い”—オンリーワンの中では昂然として放言するものもいる」(109) と述べる研究員豊田は、Z の語りとじっくり向き合ったのだろうか。

このように、Z は自分の意見を明確に述べるおんなである。また、今回本論でとり挙げている 26 名の「オンリー・ワン」たちの中で、Z だけが GI との交際について、率直に意見を述べているところが特徴的である。『街娼』の調査自体が GHQ からの要請であることを考えると、GHQ 側からすれば、「われわれの息子たち」とつきあう占領地のおんなはすべて駆除したい「害虫」であるかもしれない。GHQ の命を受けた研究調査自体、GHQ のバイアスがかかっている調査であることを考慮したとしても、Z の発言は、当時 GI とつきあうおんなたちへ世間がどのようなまなざしを向けていたかを知るにあたり、重要な発言である。

また、1947 年時点で日本「全国で 1 万 8 千人」[朝日新聞社 1989:69]「パンパン」がいたことを考えると、GI たちと交際する Z のような思いを抱いていたおんなたちは、数値化されない数を合わせると、さらに大勢存在していたことを、Z の発言は想起させる。

#### IV 面接現場というコンタクト・ゾーン——「オンリー・ワン」と調査員

本章では、「オンリー・ワン」と面接をおこなう調査員がコンタクトする面接現場をコンタクト・ゾーンとしてみたときに、調査員は彼女たちのことをどのように了解していたのか、そしてその了解にはどのような齟齬があるのかを 3 つのカテゴリーに分けて考察する。

##### 1 処女でキャッチされたおんなたち

本節では、処女であるのにキャッチされたおんなたち (D、Q) の語りに注目したい。両者とも、「オンリー・ワン」と言っていない。

D (20 才) の場合は、処女のころキャッチされたことがきっかけで、GI と交際が始まったケースである。

〇〇遊びもしていないのに、こうキャッチされるなら、やってやれという気になり、平安病院に入院中に知り合いになった友だちの家に行って、〇〇に紹介されて交際することになりました。(中略) はじめて〇〇と関係しました。(中略) その〇〇とは 3 か月目に分れまして、その後、十何人かの〇〇をかえました。今の〇〇は交際して 5 か月で、H・H といいます (215)。

Dは処女だったころ、戦死した兄の妻、Dにとっては義姉の住まいに同居しているとき、GIと交際していた姉とともにキャッチされた。Dは処女であるにもかかわらず何度もキャッチされ、そのつど性器を調べられるという性暴力を受けていたことを明らかにしている。

さらに、キャッチされたことがGIとの交際のきっかけとなって、交際相手を何人も替えつつGIとの交際を続けているのは、D自身キャッチされたトラウマを、GIと交際することで解消しようとしているようにもとれる。

住谷は、「パンパン」について、「彼女たちに共通と見られるいろいろの特徴があるが、羞恥心の比較的低いことは、その生活環境からも推測できる事である」(21-22)と、「貞操を売って生活しているということ」(23)を羞恥心の低さと結びつけている。「十何人かの〇〇をかえました」と語るDは、住谷にとって、羞恥心が「比較的低い」と分類されるかもしれない。だがこうしたDのふるまいは、処女のときに強制的に性病検診を何度も被ったという性暴力の経験の延長線上になされたものである。

強制検診とは、衆人環視のなか暴力的に捕まえられたのち、警察署あるいは病院に集められたおんなたちが、強制的に局部検診をされるという性暴力である。おんなたちが処女であるか否かにかかわらず、このような尊厳を奪われる検診をされたおんなたちは、多かれ少なかれトラウマの経験があり、PTSD（心的外傷後ストレス障害）に苦しんでいるといえよう。Dのみならず、強制検診を受けさせられたおんなたちが多かったことに注目すると、それだけトラウマを抱えているおんなたちも多いことが考えられよう。

だが『街娼』では、先に述べたレイプのみならず、強制的な性病検診やそれともなうキャッチによっておんなたちが抱えたであろうトラウマについては、言及されていない。彼女たちのトラウマを考慮しないで、彼女たちのふるまいを「羞恥心が比較的低い」と定義することはできない。

Q (19才) も D 同様、処女のときキャッチされた経験を持つ。

去年の5月家違いでキャッチされ平安病院に送られましたが、処女なのですぐ帰してもらいました。しかし恥ずかしくて憤慨して涙が出ました。6月またキャッチされましたが平安病院で処女のために帰してくれました。私の今まで何も知らなかった平安病院という所を2度ものぞいてみて、皆が美しい服を着てきれいにお化粧をしているのを見て、なんだか変な気持ちも少しは起こりました。そのすぐ後で、洋裁友達にパーティに連れて行ってもらい、ある〇〇〇〇人を紹介してもらいました。その〇〇〇〇人はコックでしたが少し仲良くなり9月5日、月経の終わった時、初めてその〇〇〇〇人のために貞操をささげました。肉体的には苦痛でしたが、その人を相当好きだったので、心の苦しみはありませんでした。(中略)それから、そこで彼との生活が始まったのです。(中略)ただ金のために2度目の男を持ったのですが、食糧をくれるのと1万円もらっているのでは大変です、間代に1500円もとられるし、家への仕送りが少なくなって残念です。私は今のような生活をして、処女を失った自分を情けなく思うとともに、転落する女性が、皆、家の事、金のためにこんなみじめになる

のですから国が何とかしてくれないものでしょうか。私は政府をうらみます。

附記 間違いでキャッチされる事2回、しかも処女なるがゆえに検診後直に帰宅を許されているが、これはゆゆしき問題、さらに病院で見聞する街娼達の悪影響は甚だしく、まことに気の毒な運命にあったといわねばならぬ。(処女であった事は院長の証明あり虚偽の告白ではない) (254-255)。

Qの口述で、注目したい点が3点ある。まず1点目は、Qはキャッチで送られた病院でおんなたちに注目していること、2点目は、国の責任を訴えていること、3点目は、QもDもともに処女でキャッチ被害にあったにもかかわらず、Qのみに調査員からの附記が記されていることだ。

1点目は、本論IIで注目した研究所助手望月の言及した「まつげの美しい人」という「パンパン」への率直な描写を想起させる発言を、Qは口述している。Qは病院で2度も「皆が美しい服を着てきれいにお化粧をしている」のを目の当たりにしたのである。望月やQのように同世代の同性の語りから、「美しい」おんなたちの存在が確認できる。と同時に、「パンパン」であるなしにかかわらず、おんなたちの外見の美しさが同性から注目されればされるほど、研究所のおとこたちがGIと交際するおんなたちの「美しさ」について沈黙していることが興味深い。調査員の附記には、「病院で見聞する街娼達の悪影響は甚だしく、まことに気の毒な運命にあったといわねばならぬ」とある。附記を記した調査員の性別は不明だが、Qは「美しい服を着てきれいにお化粧をしている」おんなたちのことを「街娼」とは言っていないし、実際、「パンパン」であるかどうかはわからない。にもかかわらず調査員の目線は、「美しい服を着てきれいにお化粧をしている」おんなたちを「悪影響」をおよぼす「パンパン」であるとみなしている。

さらに2点目の、「転落する女性」を救済するようQが国家を訴えている点について、先に引用した小倉が持ち合わせている、「国家政府への希望・不平・民生委員に関する事項など“考えたこともない”“知らない”が大半」(103)、といった「パンパン」の定義にQはあてはまらない。

最後に、処女の時に「たびたび何回でもキャッチ」(215)されたDの口述とは異なり、間違いで2回キャッチされたQの口述には、「これはゆゆしき問題」と、調査員の附記がつけられていることも注目し得る。調査員の目線では、「転落する女性」を自認し、そういう状況を作っている国を批判するQに「更生」の可能性をみて、附記を明記したのかもしれない。DもQも処女でキャッチされたにもかかわらず、「たびたび何回でもキャッチ」されたと主張するDは、「十何人かの〇〇をかえました」と語っていることで、Dのキャッチ被害は調査員にとって、「ゆゆしき問題」ではないようである。

このように、DとQに対する調査員の目線の差異が、Qの口述の附記から認識できる。

## 2 結婚を考えているおんなたち

本節では、交際相手と結婚を希望しているおんな2名(R、U)の語りに注目したい。彼女たちのことを、調査員はどのようにみているのだろうか。

まず、京都で洋裁店を経営する R (20 才) の語りをみてみよう。

大阪の女学校を出て、×・×と知り合い、19 歳〔数え年〕の時、その人のために処女を捧げました。その人は 26 才でした。今もちろん愛し合っています。私は現在、京都で洋裁店を経営し、月 3 回京都へやってきて、彼に会います。京都にもっている下宿で関係するわけです。その人は、国では運転手（自動車）をやっていたそうですが、結婚したいと思っています。新聞等は英字新聞以外は読みません。

附記 きつい性格。不利な点等しゃべらず。アイシャドーの跡あり極めて派手で、はきはきしている (256-257)。

調査員は、R のことを「不利な点等しゃべらず」という判断をくだしているが、20 才という若さで占領期に洋裁店を経営していることや、交際相手からの贈与に関しては何も語っていないことが、調査員に疑いをもたれているのかもしれない。さらに英字新聞以外読まないと述べているのが、調査員の疝に障ったのかもしれないが、若くして洋装店を営んでいる手腕の持ち主であるからこそ、「きつい性格」、「派手」、「はきはきしている」印象を調査員に与えたのかもしれない。かりに洋装店の資金の出所が GI からであったとしても、資金を貢がせる手腕があったということである。いずれにしても、R のように洋装店経営という職業を持った上で結婚したいと述べるおんなたちも、『街娼』では「パンパン」というカテゴリーに分類され、調査対象になってしまっている。R 自身は、自らを「オンリー・ワン」とは言っていない。

実家が裕福な U (21 才) は、「興味」から GI と交際するに至り、お互い結婚を約束した仲である。

母が席貸をやっていたのでハウス・メイドの時の収入の多寡は問題にならなかった。おこづかいに使ってしまった。(中略) ○○はレスリングの選手で自分と彼とははっきりした恋愛関係であり、この生活に積極的な愛着と真実感を感じている。だから今の生活には満足している。○○の○○の家族とも文通し将来結婚したいと思っている。(中略) 2 万～3 万の月取があり服装、酒、タバコなどは○○からはこんでくれるから暮らしは楽である。独立した 1 軒の家を借りている。○○が非常に好意的である。新しくきた○○のために私が選んでオンリー・ワンの恋人を紹介することも。(中略) 貯金も少しあるから結婚できないときは洋装店の経営でもやりたいと思っている。国家には住宅難を早く解決してほしいという希望がある。

附記 なめらかな口調で、すすんで話してくれる。典型的なオンリー・ワンの生活内容を持ち積極的な恋愛関係を告白している。経済的支持がたしかだから明るい表情をたたえている (259-260)。

U は、交際相手の家族と文通し、「母も一応○○と交際することは認めてくれている」(259) ことから、双方の家族公認の仲ともいえる。U の語りでとりわけ注目したいの

が、調査員はUのことを、「典型的なオンリー・ワンの生活内容」と附記に記しているが、Uの何をみて「典型的なオンリー・ワンの生活内容」なのか疑問である。というのも、たしかに下線部分の語りだけをみれば、「典型的なオンリー・ワンの生活内容」であるだろう。しかし、Uは交際相手から金品をもらいつつ、万が一結婚できなかった場合の対策として、洋装店が経営できるほど貯金をしているのである。もしこのようなUを「典型的なオンリー・ワンの生活内容」と評価するならば、小倉が、「生活のプランを作るためには社会経済的インテレストがいささかでもなくてはならない。これは彼女たちには無縁のことらしい」(103)と述べる「オンリー・ワン」の特徴とは逆のタイプである。

さらにUは、「国家には住宅難を早く解決してほしい」と訴えているが、これも「国家政府への希望・不平・民生委員に関する事項など“考えたこともない”“知らない”が大半」と小倉が分類する「オンリー・ワン」のタイプに合致しない。

### 3 調査員を翻弄するおんなたち

本節では、調査員を翻弄するおんなたち3名(C、L、N)の語りに注目しよう。まずC(19才)は、交際相手に日本滞在の延長を志願させるおんなである。

現在、オンリー・ワンとして1年ほどになります。今年帰○するはずなのですが、改めて、3か年延期を志願しました。私は下宿で六畳の間を借りていますが、月に千円ほど間代を払います。1か月の収入は3万円か4万円になります。生活は保証されていますから、現在の生活には満足しております。

附記 中以上の容貌、温順らし。現在の生活に満足(213-214)。

Cは初めて交際した相手とは結婚を約束し相手の国元から結婚許可証をもらうことになっていたが、許可証が来る1週間前に相手が帰国してしまい、結局結婚できなかったという経験をしている。この経験を踏まえてなのか、現在交際している相手に「3か年延期を志願」させている。

GIの帰国については、Cに限らず、本論ですでにとりあげた、不動産を所有し交際相手との結婚を希望しているHの「○○○が帰ったあとのことは不安」(225)、自らを「パン助」と名乗るJの「現在つきあっている○・○は2か月で帰国」(242)、日本人と結婚し離婚したTが最初に交際した「好きな人」は同棲して1年足らずで「帰国」(259)という具合に、交際相手はいつ帰国命令が出るかわからない状況にあることを考えると、Cが現在の交際相手に占領地滞在を延長させる手腕の持ち主であることがわかる。また、1か月の収入が他のおんなたちよりも高額な点において、Cの交際相手は将校クラスの階級だったのかもしれない。交際相手が将校クラスだったとしたら、Cは将校クラスのおとこに「3か年延期を志願」させるほどのやり手である。交際相手はCと別れて、予定通り帰国することもできたにもかかわらず、「延期」を志願してCと交際を続けているからだ。だが、附記の下線部分にあるように、調査員はCのことをやり手とは思っていないようだ。この点から、Cは調査員を翻弄しているといえよう。

次は、調査員に「一ぱい食わされた」と言わせたL(21才)の語りをみてみよう。Lは交際相手を「愛人」と言っている。

H女学院卒業後、Gキャバレーのダンサー、その間に愛人〔が〕出来20才のとき処女を捧ぐ。22年ダンサーをやめる。その人は23年11月に帰国。手を切る心算。当時は伏見で下宿、約1万円の収入。

附記 表面極めて温順そうな、素人娘らしい風貌ではあるが、その脱走方法や日常の言動について仲間にきけば、内面は非常に凶太い、すれっからしだという。精神科医の言をきいては、普通人の中以上に頭が良いらしい。種々、知的な話もし、柔和らしい感情に接していた調査員としては、一ぱい食わされた形である。尚相手の○・○は黒人だという(246)。

Lに対する調査員の附記の内容から、調査員はLに翻弄されたことを悔しく思っているようである。とくに下線に注目すると、「極めて温順そう」、「種々、知的な話もし、柔和らしい感情」が、「素人娘らしい風貌」に繋がっていることから、この調査員にとって「パンパン」は、そのような「風貌」ではないと思っていることを、図らずも明らかにしている。

最後は、Cと似通ったかたちで調査員を翻弄しているN(19才)の語りをみてみよう。

今年の6月末にキャバレーが閉鎖になったために止めて、河原町丸太町の洋裁学校に通うようになりました。私は酒も煙草も口にしないのですが、ダンサー時代はやはり○・○に愛されて、オンリー・ワンでつく様になりました。その○・○は22才で、下宿を一つ作っています。そこで一緒に時を楽しむわけです。(中略)ただ毎日を楽ししく暮らしたいと思いますが、結婚するならやはり日本人がいいと思います。

附記 少々ぼうっとして、おとなしそうな女性(251)。

「結婚するならやはり日本人がいい」と述べ、洋裁学校へ通っていることに注目したい。洋裁学校の資金の出所は不明だが、実家の「暮らし向きはらくな方」(251)と語るNは、GIと交際する一方で、洋裁学校に通っている理由が、日本人との結婚準備、あるいは経済的自立のためであるとするなら、Nは毎日楽しく暮らしつつ、冷静に自身のライフプランを計画し、その実現に向けて歩んでいるといえる。これは小倉の述べる、「生活のプランを作るためには社会経済的インテレストがいささかでもなくてはならない。これは彼女たちには無縁のことらしい」という定義にあてはまらない。

そして下線部分に注目すると、調査員の目には、Lが自身のライフプランを計画しているようにみえていないようである。このように調査員に「少々ぼうっとして、おとなしそうな」印象を与えている点において、Nは調査員を翻弄しているといえよう。

## V 病院の待合室というコンタクト・ゾーン——おんな同士

本章では、キャッチされたおんなたちが性病検診を受けるために待つ空間を、さまざまなおんなたちが出会うコンタクト・ゾーンとしてみた場合、第1節では、本論でとりあげた『街娼』の研究者や調査員たちは彼女たちをどのような視線でみていたか、第2節では、さまざまな出自のおんなたちが「分断支配」に巻き込まれずに、互いに助け合い、交流している可能性を考察する。

### 1 異なる光景——病院という「集会と情報交換」の場

本節では、性病検診をおこなう病院で、研究所助手小倉が目撃した「パンパン」たちの光景と、当事者がみている光景の差異に注目したい。次に示すのは、小倉が病院で目にした「パンパン」たちの描写である。

彼女たちは濃い化粧、ぬれたようなルージュ、青いターバンを巻いて病院でさえワルツを踊っている。あつまれば食物の話、オッサンの話、身の上ばなし、ポリに対するどうどうたる憤満、ごろごろねころんで物うい下劣な単調さの中に沈みこんでいる。これでは意識のオーダーは上昇することはない。社会のノーマルな流れから強制的にへだてられたこの世界。この入院という事実がアトミッシュな街娼を“一群”に形づくるようにみえる。外に出ればほとんど交際はしないらしい。連鎖的キャッチに抗する消極的方策でもある。病院が、彼女たちの最も憎悪するキャッチが結果する入院機会は彼女たちの集会と情報交換の場所となってくる (104)。

小倉の下線部分に関わって、同時期に「パンパンの世界 実態調査座談会」と題して雑誌『改造』(1949年12月号)に掲載された「パンパン」たちと知識人たちの座談会の一場面を紹介しよう。この座談会は5名の自ら「パンパン」を自明している現役「パンパン」たちと、知識人の聞き手5名でおこなわれた。

司会進行役の南博が、「グループで相談をされることは一週間に一ぺんとかあるのですか」[南他 1949:84]と質問すると、「パンパン」の1人が「検診のときに皆集まりますから、意見を発表したり、どこか場所を決めてやったりします。大体病院でやるのです」[南他 1949:84]と答えた。

このように小倉も座談会の「パンパン」たちとともに、病院が「パンパン」たちの相談の場であり、情報交換の場であることは、一致した見解である。

しかしながら小倉が病院でみた、「ポリに対するどうどうたる憤満」という「パンパン」たちの光景と、彼女たち自身がみている光景とは異なっている。『街娼』に掲載されているおんなたちの語りで、多数のおんなたちが人権蹂躪ともいえるキャッチ被害について語っているが[茶園 2013b]、数例を挙げると、「土足のまま上がり込んだり、故意にガラスを破壊したりするのは困ります」(223)、「巡查〇は靴のまま上がり、私が支度するあいだハモニカを鳴らしていました」(224)、「警察の巡查や、私服〔刑事〕は私からみれば

まるで乞食です。顔さえ見れば、オイ、チョコレートはないか、煙草をくれ、石鹸をくれなど欲しがります。徹底的にいやですし、けいべつします」(232)と、おんなたちは訴えている。また、本屋から出たところでGIから「どこへ行くのか」と話しかけられ「家へ帰る」と答えただけで、いきなりキャッチ被害に遭遇したおんなは、「〇〇にものを見たのを見たから現行犯だ」(236)と私服刑事に言われ、そのまま「キャッチ・トラック」に乗せられて病院へ来たと述べている。

自分たちの尊厳を奪うようなキャッチについておんなたちが語っているのが、小倉にはみえていないようだ。たしかに小倉は、彼女たちが病院で「情報交換」をおこなっている光景をみているものの、彼女たちの言動を研究員の理解の範囲内で了解してしまった。その結果、彼女たちに振るわれているキャッチという理不尽な性暴力に対する彼女たちの怒りも、小倉の目を通してみれば、「ポリに対するどうどうたる憤満」にしかみえない。GIとの交際でキャッチはもちろん、将兵たちに殺されたりケガを負わせられたり数々の危険にさらされているおんなたち〔南他 1949:79〕にとって、検診を受けさせられる病院という場こそが、彼女たち自ら危機管理をおこなっている場である。引用文で小倉は「連鎖的キャッチに抗する消極的方策」として彼女たちが外で交際しないことを挙げているが、病院でキャッチに遭わないよう対策を練っているとしたら、キャッチに対する「積極的方策」をとっていると見えよう。だがこの光景は、彼女たちを自分たちの了解する範囲内で分析している所員たちにはみえない光景である。

異なる光景について、もう1例だけ挙げよう。民生委員についてである。小倉は、「貧困—生活保護—民生委員の具体的に適用されるべきケースも存在するがほとんど利用していない。転落寸前の合理的な処置がここで失われているのだ」(103)と述べる。だがここでも小倉は、「パンパン」たちの現状がみえていないようである。

というのも、「バタフライ」で生計をたてているS・Tは『街娼』の口述で、「民生委員のあることは知っていますが、積極的に世話してはくれませんし、世間の噂だけで判断してしまうので、私たちには不利です」(207)と語っているからだ。占領期当時、栃木県民事部福祉担当官であったドナルド・V・ウィルソンは、栃木県で民生委員の選考委員をしていたことから〔秋山1978〕、当時の民生委員はGHQに選ばれていたことがわかる。GIたちに性病をうつすおそれのあるおんなたちを「撲滅」したい意図を持つGHQが選考した民生委員が、キャッチで捕まえられたおんなたちの「世話」を積極的にするとは考えにくい。なかには「世話」をした民生委員もいたかもしれないが、GHQの厳しい監視の目や世間の目を気にして、大半の者はS・Tが述べるように、「パンパン」と思われるおんなたちには関知しなかったであろう。こうした現状を踏まえると、社会福祉制度に関しても、小倉とS・Tとは異なった光景をみているといえよう。

## 2 おんなたちの分断回避の可能性

本節では、本論の冒頭で述べた、エンローの「分断支配」について、性病検診を待つ空間において考えよう。この空間は、GIと交際をしていてもしていなくても、キャッチされたおんなたちが一堂に出会う場である。

この場で、「分断支配」が機能した場合、次のようなことが起こるのであろう。

自身を「パンパン」ではないと表明しているおんなたちは、性病検診を待つ空間で「パンパン」であると表明しているおんなたちとは交流しない。なぜなら、「パンパン」と間違えられてキャッチされ強制的に性病検診を受けさせられているが、「パンパン」ではないからである。

一方、「パンパン」と間違われて立腹するおんなたちの態度に、「パンパン」であると表明しているおんなたちは、「パンパンでなにが悪い」と立腹する。したがって、両者は性病検診を待つ空間において、交流するどころか断絶する状態を引き起こす。

たとえ「パンパン」と自認していても、GIの恋人として、あるいはGIの売春婦として、お互いに反目しあうおんなたちは、GIに関わりを持っていることで、結果的にそれぞれが軍隊に「貢献」していることになり、「分断支配」されているといえよう。

GHQと日本の警察当局が強制的な性病検診という、大義名分に基づいて「合法的に」あらゆるおんなたちをキャッチし、「パンパン」という侮蔑的な目線をなげかけて性病検診をおこなう場でおんなたちが出会ってしまうことこそが、「分断支配」に取り込まれてしまう状況を引き起こすのだ。

しかし、「分断支配」はこのように理論上では機能するようにみえても、一義的な力関係に立脚しているにすぎない。

ここで重要な点は、「パンパン」ではないというおんなたちと、「パンパン」を自認しているおんなたちが通りで出会ったとき、「分断支配」は機能しにくいことだ。「パンパン」を自認するおんなたちの格好を見て、羨ましく感じるおんなたちもいるからである。この場合、お互い敵意を持たないであろう。

「パンパン」と「オンリー・ワン」についても、「分断支配」は容易に機能しない。というのも本論のⅢとⅣでみてきたように、「オンリー・ワン」や「パンパン」の定義はキャッチする側および調査する側には明確な定義があっても、彼女たちは自身の文脈に基づいてさまざまな解釈をおこなっていたからだ。いいかえれば調査対象となったおんなたちは、調査員たちが共有する「オンリー・ワン」や「パンパン」の定義を共有していなかったのである。おんなたちが、さまざまな定義を有しているかぎり、「分断支配」は機能しにくい。

そうすると、もはや待合室はおんなたちを分断する空間ではなく、異なる背景を持つおんなたちがキャッチの被害を避けるための情報交換や相談の場として、すなわちおんなたちのコンタクト・ゾーンとして機能し、おんなたちの分断回避を可能にするのである。

## VI おわりに——新たな関係を見出すために

本研究は、第二次世界大戦後の日本において、特定のGIと関わるおんなたち、とりわけ、「オンリー」や「オンリー・ワン」と呼ばれていたおんなたちの多様性、そして彼女たちのライフスタイルがきわめてポリティカルな空間であったことを考察し、さまざまな環境に置かれているおんなたちが、手を結ぶ可能性を考察してきた。

その際に、本論ではプラットのコンタクト・ゾーンという視点を拡大して用い、占領期の日本社会において、「オンリー・ワン」と言われたおんなたちを中心に、彼女たちとコンタクトする GI、調査員、そしておんな同士といったそれぞれの関係を、下宿、面接現場、病院の待合室という3つの場をコンタクト・ゾーンとして、論じてきた。

その結果、『街娼』に示されていた研究員たちの一義的な「パンパン」や「オンリー・ワン」では説明がつかない、多様で戦略的なおんなたちが浮かび上がった。また、コンタクト・ゾーンという視点は、おんなたちが「分断支配」を回避し、交流する可能性を提示していた。

彼女たちは、これまでの既存の概念では分析できないおんなたちであった。だからこそ既存の概念で分析すると、彼女たちがみている光景とは異なる光景が映し出されてしまう。彼女たちがみている光景を分かち合うには、これまで使われてきた固定概念、分析枠組みを捨てる覚悟がある。「規範」のものさしで彼女たちを測ることをやめたとき、彼女たちのことをもっと理解することができるのである。

#### <参考文献>

- 青木深 2013 『めぐりあうものたちの群像——戦後日本の米軍基地と音楽 1945-1958』大月書店。
- 秋山智久 1978 「ドナルド・V・ウィルソン博士の“証言”」『占領期における社会福祉資料に関する研究報告書』小野顕編、pp.237-248、(財)社会福祉研究所。
- 朝日新聞社 1989 「闇にひらく東京の花——ラクチョウの女・山川婦人少年局長を囲む」『昭和20年代「週刊朝日」の昭和史第二巻』朝日新聞社編、p.69、朝日新聞社。
- 飯塚浩二、伊藤あき子、北川とし子、佐多稲子、田中文子、藤澤七生、三浦美紀子、三島由紀夫、南博、宮城音彌、森田政次 1949 「パンパンの世界——実態調査座談会」『改造』30(12):74-87。
- 榎本貴志雄 1949 「売春婦の社会衛生」『街娼——実態とその手記』竹中勝男・住谷悦治編、pp.27-71、有恒社。
- エンロー、シンシア 2006 『策略——女性を軍事化する国際政治』上野千鶴子監訳・佐藤文香訳、岩波書店。
- 大塚達雄 1949 「街娼誕生」『街娼——実態とその手記』竹中勝男・住谷悦治編、pp.89-96、有恒社。
- 荻野恒一・鈴木義一郎・杉本直人(京都大学医学部精神科教室) 1949 「街娼および接客婦の精神医学的調査——京都地区を中心として」『街娼——実態とその手記』竹中勝男・住谷悦治編、pp.71-86、有恒社。
- 小倉襄二 1949 「街娼の社会像」『街娼——実態とその手記』竹中勝男・住谷悦治編、pp.96-106、有恒社。
- 笠間千浪 2012 「占領期日本の娼婦表象——「ベビサン」と「パンパン」：男性主体を構築する媒体」『<悪女>と<良女>の身体表象』笠間千浪編著、pp.199-242、青弓社。
- 作田啓一 1949 「街娼の印象」『街娼——実態とその手記』竹中勝男・住谷悦治編、

pp.86-88、有恒社。

サムス、クロフォード・F 1986 『DDT革命』竹前栄治編訳、岩波書店。

住谷悦治 1949 「迷路に舞踏するもの」『街娼——実態とその手記』竹中勝男・住谷悦治編、pp.12-27、有恒社。

竹中勝男 1949 「街娼の調査について」『街娼——実態とその手記』竹中勝男・住谷悦治編、pp.1-12、有恒社。

竹中勝男・住谷悦治編 1949 『街娼——実態とその手記』有恒社。

田中雅一 2011a 「はじめに」『コンタクト・ゾーンの人文学 第一巻 *Problematic* / 問題系』田中雅一・船山徹編、pp. i - iv、晃洋書房。

———— 2011b 「コンタクト・ゾーンとしての占領期ニッポン——『基地の女たち』をめぐって」『コンタクト・ゾーンの人文学 第一巻 *Problematic* / 問題系』田中雅一・船山徹編、pp.187-210、晃洋書房。

茶園敏美 2002 「語り尽くされること／了解されてしまうこと——「パンパン」という表象」『女性学年報』23:90-107。

———— 2005 「おんなたちを管理する法制度——花柳病予防法特例から性病予防法まで」『大阪大学日本学報』24:45-61。

———— 2006 「『パンパン』とは誰なのか——「あこがれ」と「欲望」のゆくえ」大阪大学大学院文学研究科博士論文。http://ir.library.osaka-u.ac.jp/dspace/handle/11094/1394。

———— 2013a 「『闇の女』と名づけられること——占領初期神戸市における一斉検挙と強制検診」『同志社アメリカ研究』49:1-22。

———— 2013b 「占領期のキャッチとおんなたちの「声」——占領期日本における不問にされた性暴力」『女性学年報』34:88-103。

豊田慶治 1949 「街娼瞥見」『街娼——実態とその手記』竹中勝男・住谷悦治編、pp.106-111、有恒社。

平井和子 2014 『日本占領とジェンダー——米軍・売買春と日本女性たち』有志社。

古久保さくら 2001 「敗戦後日本における街娼という問題」『人権問題研究』1:4-16。

望月嫩 1949 「同性として」『街娼——実態とその手記』竹中勝男・住谷悦治編、pp.112-115、有恒社。

モラスキー、マイク 2006 『占領の記憶 記憶の占領——戦後沖縄・日本とアメリカ』鈴木直子訳、青土社。

Enloe, Cynthia 2000 *Maneuvers: The International Politics of Militarizing Women's Lives*. Berkeley CA: University of California Press.

Pratt, Mary Louise 2008 *Imperial Eyes, Travel Writing and Transculturation*. 2nd Edition. London: Routledge (1st Edition,1992) .

**Women who associated with GIs:  
the "Only Ones" during the American Occupation of Japan**

Toshimi CHAZONO

Keywords: panpan, prostitute, contact zone, divide and conquer, solidarity

In this paper, I regard Japan during the occupation period as what I would like to term a “contact zone” where people of all kinds negotiated and had had dealings with each other. It was not merely a case of the victorious Americans governing the defeated Japanese. I will demonstrate that women in Japan negotiated with GIs (American Soldiers) on an equal footing.

Tanaka [2011a], following Pratt [1992], describes "contact zones" as sites where people of different cultural and socio-economic backgrounds come into contact with each other. Tanaka regards Japan during the American Occupation as a contact zone and has acutely established various discourses of Japanese intellectuals, activists, women and children in place of a simple category of streetwalkers.

My research has led me to examine the oral reports of 26 women that have been published by the Kyoto Institute for Social Welfare. These are all women who had been forced to undergo examinations for the detection of venereal disease (VD) , on account of having had sexual relations with GIs as their girlfriends and lovers. They were regarded as "High-priced Streetwalkers" and categorized as “Only Ones” by the Kyoto Institute because they were regarded by the institute as women who had had sex in exchange for money or goods with only one member of the American military personnel. The main scholars of the institute define "Only Ones" as women who are careless with money and voluptuary. In addition, scholars also write, as a definition, that these women have no interest in social economy, depend on the GIs, and prefer licentiously sexual lifestyles. Such a definition is based upon the notion that the "Only Ones" and GI's can't negotiate with each other.

However, regarding the relations between “Only Ones” and GIs, it is clear that their relationships are complicated and of multiple natures- “Only Ones” don’t quite depend on GIs, nor do they do nothing.

In this paper, I consider contact zones as sites during the Occupation period in Japan that can be categorized according to the following three purposes: lodgings where women could have contact with GIs; interview rooms where women had contact with investigators, and hospital waiting rooms where various women could have contact with each other.

Moreover, I consider the possibility that women in various circumstances could help and support each other from this point of view of contact zones. Especially, I pay attention to waiting rooms in hospitals where women were forced to undergo VD examinations. The hospital waiting room is one of the spaces where GHQ and the Japanese Government attempted to use "divisive

efforts" (Enloe 2000) to separate the women. Enloe (2000) notes, "there are very few instances in any country of military wives joining in an alliance with military prostitutes and together devising a joint action along with women soldiers." Enloe adds that "Government officials have been remarkably successful in these divisive efforts." Women can essentially find unity among themselves against the unfair violence of roundups in various ways. Nevertheless, they were confronted together by the "divisive efforts" of the authorities.

Some women, however, don't become involved in such "divisive efforts." As I demonstrate in sections 3 and 4 of the paper, it is unclear which women are street girls or just lovers, and each of them has a different meaning in regard to the term "Only Ones." They are able to have relationships with GIs both as street girls and not as street girls, thus such women can help and support each other in the waiting spaces. When we pay attention to these relationships between the women and GIs from the viewpoint of contact zones, Enloe's "divisive efforts" is also a framework for assessing this situation from the point of view of simple power relationships.

Focusing on their oral histories carefully, we can see that women come to the front. Women such as "Only Ones" are women whom we cannot easily analyze. If we use superficial analyses, we cannot understand and appreciate their experiences. In order to approach what these women experienced, it is necessary that we are ready to give up stereotypes and old frameworks which have been used in the past. When we stop judging them from fixed rulers, we may notice that we can understand them more.